

An Initiation to Africa コート・ジボワールから(現地通信)

著者	武内 進一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1987-03
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008767

An Initiation to Africa

—コート・ジボワールから

● 武内進一

昨年11月、20日余りコート・ジボワールへ出張した。初めてのブラックアフリカであったにもかかわらず、効率よく国内を見て回ることができた。アビジャン近郊はもちろん、ブアケ、コロゴ、サン＝ペドロといった地方都市でも周辺の農村を数多く見学できたのは、同行のH氏と開発公社のおかげだと思っている。

独立以来、アフリカでは稀有の高度成長を遂げたコート・ジボワールの原動力は農業である。コーヒー、ココア、木材を中心とする農産物輸出で外貨を稼ぎ、それに基づく国家資本とフランスをはじめとする外国資本の力で工業化を推進した。現在も深夜のテレビ放送終了時に、「この国の成功は農民の努力に基づくものである」というテロップが流れる。農業が国の根幹であるという意識に変化はない。

その農業、特に商品作物栽培の技術指導や、農産物流通の統制は、当然のことながら政府の重大関心事であり、開発公社や国営企業がそれらを担うべく設立されている。行政と農民との接点であり、われわれが農民に接近する時の窓口がこれらの組織である。今回の出張ではこの窓口が随分と世話になった。

●北部へ アビジャンに到着してからゆっくりする間もなく、中部の中心都市ブアケに飛んだ。ブアケは当国第二の都市であるが、アビジャンと比べれば人口規模は約8分の1、しかも約100キロメートル南西にあ

る新首都ヤムスクロのために、この街の影はいつそう薄くなりつつある。われわれが泊ったブアケ第1と言われるホテルも、フロント係がポーターからボーイまで兼ね、レストランに行けば客はいつもわれわれのみと、この街の現状を象徴する感がした。

ブアケの重要性は現在、CIDT (Compagnie Ivoirienne Pour le Développement des Textiles : 繊維開発公社) の本社が存在するという点に集約される。CIDTは北部開発公社 (正確にはフランス資本との混合企業) として、綿花を一括買付けして繰綿を行なっている。

そのCIDTのフランス人研究者B氏に頼んで、周辺の農村を見学させてもらった。CIDTは多数の農業普及員を農村に配置しており、彼らの案内で畑を見て回ることとなった。CIDTが指導する農作物は、綿花、水稻、とうもろこし、落花生であるが、特に綿花の生産増大に力を入れている。綿花は農民の所得機会を増やすと同時に、繊維産業を育成して輸入代替工業化を推進するための、戦略的換金作物として位置づけられている。案内されたのはCIDTの指導で開墾されたという綿花畑だった。

説明によれば、綿花畑は集団で開墾し、家族員数 (保有労働力数) を基準として各世帯の面積 (0.5ヘクタール単位で3ヘクタールまで) を決めて、CIDTが分配しているとのことである。マリ人、ブルキナファソ人といった近隣諸国からの移入民

に畑を分配する場合もある。

畑が分配されると、栽培から収穫まで農民は家族ごとに働くこととなる。集荷作業については、綿花はCIDTに一括買付けされるため、共同で行なうところが多い。北部の街コロゴでこの集荷作業を見る機会に恵まれた。

コロゴCIDTの職員に案内され、近隣の農村に行ってみると、簡素な小屋の前に巨大なトラックが横付けになり、その周りにあふれんばかりの綿を包んだビニール製の大風呂敷が40～50個ずらりと並んでいる。買付けの連絡を受けた周辺の農家が運んできたものだ。小屋のなかで担当官が綿の品質を決定し、重量を計って、農民に買い値を記入した引換券を渡す。この買付総額は農業開発銀行 (BNDA) に振込まれ、引換券で現金を入手できるしくみである。

計量が終わった綿はそのまま横のトラックに放り込まれる。荷台の綿の量が増えると、さらにたくさん積むために、農民たちがトラックに上って綿を踏みつけ始めた。大きな荷台である。綿を踏んでいた10数名の農民は、いつしか環になって、荷台のなかをぐるぐると回り出す。そして唄が始まる。普通のホイッスルと、



荷台の中を歩き、唄う

金属板を石でこすって調子を入れ、1人がリードをとって、残りがそれに唱和する単純な節まわしである。唄はいつまでも続いた。とても美しい光景だった。

●南部で 南部の主要商品作物は、言うまでもなくコーヒー、ココアである。これらの作物の栽培指導はSATMACI (Société d'Assistance Technique Pour la Modernisation Agricole de la Côte d'Ivoire : コートジボワール農業近代化技術助成公社) が担当し、CIDTと同様、普及員を農村に派遣したり、簡単な農機具を援助するなどの活動を行なっている。一方、流通に関しては100% 国家資本のCSSPPA (Caisse de Stabilisation et Soutien des Prix des Produits Agricoles: 農産物価格安定支持公庫) が権限を持ち、生産者価格から輸出価格まで流通各段階の価格取決め等を行なう。

リベリア国境に近い港町サン＝ペドロでは、飛び込みでCSSPPAを訪れた。他の建物とは段違いの清潔・豪華な造りである。CSSPPAはコーヒー、ココアの買付けに直接はタッチしないものの、輸出に際して巨額のマージンを吸い上げ、その収益はコートジボワールの高度成長の源泉でもあった。われわれが面会したサン＝ペドロ支部長の執務室も、CSSPPAが自らの力を誇示するかのような、豪華な内装が施されていた。

ここで会った支部長は、気難しそうな顔をしてデスクに座っていたが、彼の母語ジュラ語をH氏が話すことを知った途端、「ヒーッ、ヒッ、ヒッ」というアフリカ人独特の笑い声を発して態度が豹変し、われわれに工場見学のアレンジまでしてくれた。豪華な部屋と彼の笑い声が、どうもいまだにしっくりこない。

アビジャン近郊の村へは、H氏のつてを頼って行った。20年来の知り合いという村長さんである。われわれが訪ねると、H氏の名を連呼しながら、ラム酒の壺をぶら下げて出て

くる。朝7時半である。コーヒー、ココアの林を見せてくれるよう頼むと、その前に一杯やれと勧められた。その間にも村人に命じて、最近捕まえたというワニの仔を持ってこさせる。ワニは金網をかぶせたバケツに入れられ、じっとしている。子供が棒で突くと、ワニの仔がうなる。子



コーヒーの日干し

供たちが跳びのき、大人が怒る。

ついでながら、子供たちには出べそが多い。小さな女の子が、少年の出べそをいじってけたけた笑っている。少年はうるさそうに払いのけながら、ワニとわれわれの顔とを交互に眺めている。ワニの仔と日本人と、子供たちにはいい見世物である。

村長の畑を見学に出かける。彼自身、農業労働者を5人雇う富農である。コーヒー、ココアの他に、トマト、なす、とうもろこし、キャベツ等の野菜を栽培しており、自ら卸売市場までトラックを駆って売りに行くという。

コート・ジボワールは独立後、着実にコーヒー、ココアの生産量を増やしてきたが、これは土地生産性の上昇と言うよりは、栽培面積の拡大を通じて達成された。その拡大は、一般に近隣諸国などから移入した農業労働者が土地を得て定着し、小農戸数が増加したことに起因するものであり、富農による土地の集中は目立った形では生じなかったと言ってよい。しかしながらこの村長のように、自らも広大な土地を持ち、農業労働者を雇用する(1人当たり毎月3

万CFAフラン=約1万5000円、支払うという) 富農も、都市近郊には出現しつつあるのだろう。

他で見たコーヒー、ココア林が、アボカド、コーラあるいは普通の木々に混ってかなり雑然と植えられていたのに対し、彼の林は開墾時期が古いためか整然と植わっている。

11月は収穫の季節だ。収穫されたココアは3~4日容器に入れて発酵させ、表面のぬめりを取った後に、2~3週間天日で乾燥させて出荷される。コーヒーはそのままやはり2~3週間乾燥させ、出荷される。連れていかれたのは彼が雇う農業労働者の家で、庭先にはコーヒー、ココアが竹と木で編んだ日干し台の上にざっと広げられている。かなりの収量である。彼は、自分の畑でココア6.5トン、コーヒー9.5トンが取れると豪語していた。

広げられたコーヒーの実を眺めているうちに、緑色の豆が目につくことが気にかかった。コーヒーの実は熟すと小豆色になるはずだから、まだ完全に熟さぬうちに摘み取られた実が多いことになる。コーヒー剥皮工場で、農民が未熟の豆まで出荷してしまうためにコーヒーの品質が落ちて問題だ、と聞いたことを思い出した。小豆色の豆も緑色の豆も、乾燥させてしまえば同じく茶色になって見分けがつかないのである。SATMACIの指導はどうなっているのかと思ひ尋ねてみた。彼答えていわく「SATMACI? そう言えば普及員が村にいることは知ってるけど、何しとるか知らんね」。

われわれにとつての農民への窓口と、実際の農民との距離は、あくまで遠いようである。

(たけうち・しんいち/アフリカ総合研究プロジェクト・チーム)